

今日におけるワイルドの美的世界

堀江珠喜

(園田学園女子大学助教授)

ロンドン、ダブリンにわずか2週間あまりの滞在とはいえ、その気になればずいぶんワイルドの世界に触れることができる。それが今回の旅の感想だ。もっともアカデミックというよりは、ジャーナリスティックな、あるいはいわゆる「ミーハー的」なレベルでの好奇心によるものであることは否めないが、ともかく数年前に『ワイルドの時代』で書いた事柄の確認や、訂正、補足の意味もあって、これらの都市を歩き回る。ひたすらワイルドの影を求めて。

最初に訪れたのはサヴォイ・ホテルである。二泊してワイルドの“beyond my means”の気分を味わいながら、広報部へ押しかけた。ワイルドが滞在していた記録等がないかと思っただが、期待はずれ。資料調査係がくれたのは、1893年3月ワイルドにあてた請求書のコピーのそのまたコピーである。この時期にあのボジーあての手紙“Your letter was delightful, red and yellow wine to me”が書かれたのだが、サザビーの競売でサヴォイはこの請求書をせり落とせなかった。真赤なサロメ・カクテルを一階のバーで見つけたことが、せめてものなぐさめだ。

サヴォイとは対照的に、カドガン・ホテルは、ワイルドが常連であったことをセールスポイントにしている。パンフレットに「逮捕された」とは書かれていないが、それ以前にもよく利用していたのである。タイト・ストリートに近く、また建物の後部が憧れの女性、リリー・ラングトリーのかつての住居であり、ホテルに売却後もここを常宿としていたためであろう。

このホテルのレストランには彼女の名がついているし、日曜日のメニューにはワイルドのアフォリズムがちりばめられている。もちろん彼らの写真は、あちこちに飾ってある。ワイルドが使った部屋に泊まることも可能だ。

ロンドンで、ワイルドゆかりのレストランといえば、カフェ・ロワイヤルとケトナーズである。改築・改装をしているが、二店とも現存している。前者のバー入口には、ワイルドの首の彫刻が飾られ(1856-1900)となっていたので翌日、支配人に1854の間違いだと言き送った。もし機会があったら訂正の確認をしていただきたい。また上階の踊り場にワイルドの写真がいくつも飾られ、パンフレットの広告文に彼の名が使われている。以前はメニューにも書いてあったのだが。

ケトナーズには全くワイルドに関連する物は見当たらないが、二階に個室がある。きつとテイラー達を招いたのも、こんなところだったのだろう。ごく普通のイタリア料理店だ。

それにしても『真面目が肝心』を観る機会を得たのは幸運だった。しかもすべて男性による、その名も Ernest Productions なる素人劇団で、利益は AIDS 基金に寄付されるというもの。観客の大部分は、同性愛者らしい男性である。

座長演じるブラックネル卿夫人は迫力満点であり、この役は男性に向いていると思われた。ジャックとアルジェノン、ジャックとメリマンのあいだが、「あやしい」という解釈も面白い。この劇は、演出次第でさまざまな可能性が発揮できると改めて感心した。

ダブリンではピーコック座で、ユーリック・オコーナー作 *A Trinity of Two* がかかっていた。これはトリニティ・カレッジの同級生であるワイルドとカーソンが、クイーンズベリ裁判で対決するという皮肉な運命をテーマにしている。ワイルドの有名なアフォリズムが楽しめる一方、重苦しい裁判の場面が再現される。元弁護士でナショナリストのオコーナー氏らしい作品だ。後日この作者をお訪ねしたのだが、書斎の机の上にワイルドの警句集を見つけたとき、なんとなくおかしかった。

この芝居では、敗訴したときワイルドがバリーに逃げなかったのを、母親の「Irish Gentleman であれ」という言葉に従ったものと解釈している。またカーソンが、トリニティ時代から家柄と成績の良いワイルドに、コンプレックスを抱いていたという見方も面白い。

さてオスカリアンの最も興味をそられるのが、タイト・ストリートやメリオン・スクエアの建物であろう。今では各階、居住者が異なり、ワイルドの時代の面影があまりないのは残念だが、その一部に入り写真をとらせてもらった。筋骨たくましい男性なら警戒されただろうが、これも小柄な東洋の女の特権か。しかし誰かが記録しておくべき資料だと思う。

ロンドンでお会いした1890年代協会の Krishnamurti 博士は、「ワイルドだけが世紀末ではない」と優しく論してくださいましたが、やはり私にとってはワイルドの時代に他ならない。コマーシャルイズム、ジャーナリズムのレベルで扱われるため、アカデミズムから敬遠されがちな「ワイルド」である。が、それがまたワイルドらしさであることを認識した上で、今後の研究、協会のあり方を考えるべきであろう。

Ut pictura poesis.

吉田正俊

(共立女子大学名誉教授)

「詩も絵のように」ホラチウスの名文句で始めるきざな術学趣味は、私の長所です。シ

シンポジウムの主題「ワイルドと美術」は、最近流行し出した「学際」的発想に追随したのではなく、2000年むかしのホラチウスの文芸観に目ざめた営為です。

最初の発言は河内恵子慶大助教授の「装いの哲学——ワイルドの芸術論の一形態として」と題する服装論です。「外面で判断しないような人は浅薄だ」と断言したワイルドにとって、服装は極めて深刻な関心事でした。ワイルドが「世間の人々の注意を引くためにとった手段は“aesthetic costume”を身につけることであった」（河内氏）という断言から、「装う」という「表層的・外面的概念が内包する深遠な意味を、ワイルドはさまざまな文学ジャンルを通して伝えようとしていた」（同氏）こととなります。そこからワイルドの「装いの哲学」が紹介され、ゆるやかな線を基調とするギリシャ式服装への憧憬が論じられました。ワイルド自身が「装い」に関心を示して、単なる空論家でなかったことの指摘も、貴重な結論となっています。

次いで玉井 暲大阪大学助教授は「ワイルドとホイッスラー——詩と絵画の領分をめぐって」という主題で、ワイルドの文芸論に踏み込んでおられます。「絵画と文学はそれぞれ固有の特性をもつものであって、その間の安易な混交は認めるべきではない」（同氏）というワイルドの主張を紹介し、そこからジャンルとしての相違点を、主としてホイッスラーの作品を中心として論じられました。この問題は19世紀からイギリスで関心を持たれ出した「物語絵画」（narrative painting）と深い関わりがあります。物語絵画は文学の侍女ではないので、小説の挿絵は物語絵画とは見做しません。また基督ヤマリヤや聖者をめぐる宗教画、歴史画、個人的な肖像画も、物語絵画には入れないことになっていることを、ワイルドは気付いていたのでしょう。

発言者はワイルドが「ホイッスラーの純粋に絵画的な絵画を製作しようとした営みを高く評価している」と語られた後で、やがて「ホイッスラー離れ」が始まる悲劇を紹介し、結局は「詩人は最高の芸術家だ」（エルマン）という断言に達しています。

「第三の発言者」井村君江教授は、“Wilde as a Critic of Arts”と題して、ワイルド自身の実生活を踏まえた好個の論旨を展開されました。ワイルドが「グロヴナー・ギャラリーの開館記念展の絵画を観て書いた美術評が活字になった初めての評論で、Wildeの出発は美術批評であった」（同氏）という貴重な指摘から始まり、やがてP. R. B. との接触と「その影響から意図的に抜けていく次第」。次いで論旨は、初期のワイルドが絵画の考え方で最も影響を受けたホイッスラー、およびホイッスラーとラスキンの裁判事件のきっかけとなった作品をめぐって、ワイルドが早くも洩らしたことば「これらの絵は確かに鑑賞するだけの価値があるが、実際の花火が見える時間、つまりただか15秒ぐらいの間である」という提言から、発言者は「ワイルドは存外古典派の美術を好み、新しい絵画に反撥する感覚を持っていたことを示している」と推論を下しておられます。

ホイッスラーに対するワイルドの評価は、ある時は暖かく、ある時は背反的で、やがて

ホイッスラーと袖を分かつことになる事情も紹介され、最後にワイルドの思想は彼の「審美的服装」に表現されると結論されました。「審美的服装」（aesthetic costume）ということばが、シンポジウムで最初に論じられた「ワイルドの服装」に還ることになり、3氏の論陣は鮮やかにワイルドの美術評論家としての存在を照らし出したことになりました。めでたい止揚統合です。

めでたくないのは本稿です。メ切日におくれて、編集担当の先生にご迷惑をおかけしました。しかしワイルド的極印の証(あ)して許して頂きます。ワイルドの立言によれば「時間厳守は時間泥棒です」。

装いの哲学——ワイルドの芸術論の一形態として——

河内 恵子

（慶應義塾大学助教授）

Granville Hicks がその著 *Figures of Transition* (1939) で指摘しているとおり、ワイルドは自己宣伝という手段を用いて自らの芸術論を世に問い、その芸術論の体現者として自らを限りなく象徴化していった。具体的に述べてみよう。

1878年 Oxford 大学を卒業したワイルドは、“a Professor of Aesthetics and a Critic of Art”として世に出た。その際、世間の人々の注意を引く為に彼がとった手段は“aesthetic costume”を身につけることであった。自らの考えに耳を傾けてもらうには、まず自らの存在を知ってもらわなければならない。存在を知ってもらう為には何か奇抜なことをして自らを見てもらわなければならない。「単純」「軽薄」といった類のそりを受けることは十分に承知していたながらも、いや承知していたからこそ、ワイルドは敢て“aesthetic costume”を装うという「単純軽薄」な手段に頼ったのだ。こうすることによって確実に世間の人々の注意を引き、ひいてはジャーナリズムに携わる人たちの意識を自らの方に引き付けることが出来るとワイルドは信じて疑わなかった。服装という「外面」のもつ重要性を熟知していたワイルドであったからこそ、自己宣伝の為にこの「外面」を巧みに利用したのである。しかし「外面」すなわち「装い」に対するワイルドの関心は「自己宣伝」の段階にとどまるものではない。衆人の注目を浴びる為に“aesthetic costume”を身にまとい、この自己宣伝によって文人としての生を生き始めたワイルドが、「装う」ことに抱き続けた関心は非常に深く、その「表層の美学」を「装いの哲学」と言い換えてもあながち間違いとはいえない。